

# 万葉集3789番歌の解釈について

竹生 政資<sup>1</sup>, 西 晃央<sup>2</sup>

## An Interpretation of the 3789th Poem in Manyo-shu

Masasuke TAKEFU, Akihiro NISHI

### 要 旨

万葉集3789番歌「あしひきの 山縵の児 今日行くと 我に告げせば 帰り来ましを」は三人の男たちから求婚されて入水自殺した娘の死を悼む歌である。この歌の訓読については特に問題ないが、解釈については次の二つの説がある。一つは「もし娘が『今日死に行きます』と私に予告してくれていたら、旅先から帰って来るのだったのに」と解するもので、もう一つは最後の句を「(娘を死なせずに私が助けて) 帰って来たことであろうに」と解するものである。

ところが、こうした従来の解釈にはいずれも問題がある。もっとも素朴な疑問は、昔も今も「今日これから死に行きます」と予告してから死ぬ人はめったにいないだろうから、「もし死ぬ前に私に予告してくれていたら…」という解釈は少し不自然である。そのほかにもいくつか問題点がある。本論文ではこうした従来の解釈の問題点を再検討した上で新しい解釈を提案する。

### 1. はじめに

巻十六に収録されている万葉集3789番歌は、その背景を語る長い題詞の説明によると、三人の男たちから求婚された娘が対応に苦慮して入水自殺してしまい、悲嘆にくれる当事者の男たちが娘の死を悼んで詠んだ歌（三首）の一つである。そこでまず、歌の題詞（現代語訳）と3789番歌を含む三首の内容（訓読文と原文）を新日本古典文学大系本に従って掲載することから始めよう [1]。

**【題詞の現代語訳】** ある伝にこう言う。昔三人の男がいた。同時に一人の女に求婚した。娘子が嘆息して言うには、「一人の女の身は露のように消えやすく、三人の男の気持は石のように和らげがたいのです」。そしてその後、池のほとりにたたずみ、水の底に沈んでしまった。その時、男たちは悲しみと失望に堪えがたく、それぞれに思うことを述べて作った歌三首（娘子は字を縵児と言う）

16/3788 <sup>みみなし</sup>耳成の <sup>かづ</sup>池し恨めし <sup>か</sup>我妹子が <sup>かづ</sup>来つつ潜かば <sup>か</sup>水は潤れなむ 一

**【現代語訳】** 耳成の池は恨めしい。あの娘が来て身を投げたら、水は潤れてほしかったなあ。

<sup>1</sup> 佐賀大学 医学部 地域医療科学教育研究センター (takefu@cc.saga-u.ac.jp)

<sup>2</sup> 佐賀大学 文化教育学部 理数教育講座 (nishia@cc.saga-u.ac.jp)

16/3789 あしひきの 山縵かづらの児 今日行くと 我に告げせば 帰り来ましを 二  
 【原文】足曳之 山縵之児 今日往跡 吾尔告世婆 還来麻之乎 二

16/3790 あしひきの 山縵かづらの児 今日のごと いづれの隈を 見つつ来にけむ 三  
 【現代語訳】(あしひきの)山縵の乙女は、今日私が見るように、どの曲がり角を見ながら来たのだろうか。

次に、上の3789番歌に関する先行研究の概要を知るために、代表的な万葉集注釈書に掲載されている現代語訳と注釈を出版年の新しいものから順に掲載しよう。訓読文はすべての注釈書で一致しているので省略した。なお、記載形式をそろえるために内容に影響を与えない範囲内で順序や記号表記などを一部変更し、漢字の旧字体は新字体で置き換えた。また、注目箇所には下線を引いた。

#### ① 新日本古典文学大系<sup>[1]</sup>

【現代語訳】(あしひきの)山縵の乙女が、今日行くと私に予告してくれていたら、帰ってくるのだったのに。

【注釈】第三句の「今日行くと」は、今日死に行くこと、の意。「告げせば」は仮定。「嘆きせば人知りぬべみ」(一三八三)、「いかにせば我が門過ぎじ」(四四六三)。男はその日、不在だったことになる。

#### ② 新編日本古典文学全集<sup>[2]</sup>

【現代語訳】(あしひきの)山縵児が 今日逝きますと わたしに一言告げてくれたら 帰って来るのだったのに

【注釈】山縵の児——縵児の言い換え。ヤマカヅラはひかげのかずら。ひかげのかずら科の多年草で、ニメートルにも達するその茎は、神事の際のカヅラや冠の掛物などに用いられた。山カヅラカゲ(三五七三)・山下ヒカゲ(四二七八)とも。○帰り来ましを——作者がその時遠い所にいて娘子の自殺を引き留めることができなかつたことを悔む趣。

#### ③ 講談社文庫(中西進)<sup>[3]</sup>

【現代語訳】あしひきの山縵の児が、今日入水してしまうといってくれたら、帰って来たものを。

【注釈】あしひきの——山の形容。縵児の名から「山縵」(ひかげのかずらのこと)を連想して、その山に続けた。縵児を三七八八の注4の如く解すると山ごもりし、実際に山縵をしていたか。○往く——池に行く。○告げせば——「せば… まし」は反実仮想。

#### ④ 万葉集註釈(澤瀉久孝)<sup>[4]</sup>

【現代語訳】山縵の子が今日死に行くことに私に告げてみてくれたら、私は帰って来ようものを。

【注釈】あしひきの——山の枕詞(二・一〇七)。

山縵の子——女の名前が縵子であるから、山をつけて「山縵」と云つたので、山縵はひかげのかづら。「山かづらかげ」(十四・三五七三)ともあつた。

吾に告げせば帰り来ましを——「せ」は仮設の助動詞の未然形で、同じく仮設の「まし」と呼応してゐる(一・六七)。告げたならば帰って来ようものを、といふので、告げなかつたから帰って来ることが出来なかつた、の意である。

⑤ 日本古典文学大系<sup>[5]</sup>

【現代語訳】私の縷児が、今日耳梨の池に死にに行くと、まえもって私に知らせてくれたなら、死なせずに、助けて帰って来たことであろうに。

【注釈】あしひきの——枕詞。○山縷の児——娘子の名を、縷児といったので、それにいいかけたもの。ヤマカツラは、ヒカゲノカズラのこと。卷十四、三五七三に、ヤマカツラカゲとある。○今日ゆくと——今日池に死にに行くと。○われに告げせば——私に告げたならば。セバは、過去の助動詞キの未然形に助詞バのついたもの、仮定の条件句をつくる。○還り来ましを——マシは、上のセバを承けて、反実仮定の意をあらわす助動詞。マシは感動の助詞。カヘリは作者が、旅先から帰る意味にとる説も少なくない。代匠記・万葉考によって、助けてかえり来る意にとる。

以下の第2節では、上に示した五つの先行研究の問題点について検討し、続く第3節でこれら問題点を解決できる新たな解釈を提案する。

## 2. 先行研究における問題点

前節に示した五つの先行研究(①から⑤)は訓読については次の訓み方ですべて一致している。

16/3789 あしひきの 山<sup>かづら</sup>縷の児 今日行くと 我に告げせば 帰り来ましを

ところが歌の解釈については、第一句から第四句までを「娘が『今日死にに行きます』と私に告げてくれていたならば」と解する点では一致しているが、結句「帰り来ましを」の解釈が異なっている。①から④は、娘が死んだとき作者はどこか遠くの旅先にいたと想定した上で、「(旅先から急いで) 帰ってきたであろうに」と解する。これに対して⑤は「(死のうとする女を説得し、助けて) 帰って来たであろうに」と解している。以上が先行研究の主なポイントであるが、従来の解釈にはいずれも問題点がある。まず①から⑤のすべてに共通する問題点を二つ指摘しよう。

第一の問題点は、これから死のうとする人が果たして「今日死にに行きます」と告げてから死ぬだろうかという素朴な疑問である。その人が心を許している身近な人に告げるのならまだしも、今の場合、告げる相手は死の原因を作った当事者の男である。しかしこのような問題指摘に対して、次のように反論する人がいるかも知れない。この歌の「今日行くと 我に告げせば」は反実仮想であるから、現実には起こりえないような内容の仮定でも何ら問題ないのではないかと。実際、万葉集中には次の歌のように現実には絶対に起こりえないようなことを仮定している歌も多くある。

15/3671 ぬばたまの 夜渡る月に あらませば 家なる妹に 逢ひて来ましを

ところが、反実仮想の歌の中には、現実に起こりうることではあるが、実際にはたまたまそれが起こらなかったことを後で後悔して「もしあの時... が起こっていたならば」という内容の歌もまた多い。以下に例を一つ示す。

10/2148 あしひきの 山より来せば さ雄鹿の 妻呼ぶ声を 聞かましものを

この歌は「もし山道を通ってきたならば」という反実仮想になっているが、山道を通ることも起こり得た

のに、たまたまその時には別の道を通ってきたため鹿の妻呼ぶ声が聞けなかったと、後で「後悔」しているのである。

したがって、いま問題にしている3789番歌の場合も、この歌がもし「後悔」の気持を詠んだものだとすれば、上の2148番歌と同じように、その条件部には「(実際には起こらなかったけれども) 起こる可能性が十分あったこと」が仮定されるはずである。でなければ単なる空想だけの歌になってしまい「後悔」の歌にはならないからである。ところが、通説の解釈だと3789番歌の仮定条件は「娘が死ぬ前に『今日死に行きます』と私に告げてくれれば」という現実にはとても起こりえない内容となっている。これが第一の問題点である。

第二の問題点は、もし通説が言うように第三句の「今日行く」が娘が死ぬ「前」に言った言葉だとすると、「今日行かむ」のように本人の意志・推量を表わす助動詞「む」が付くべきではないだろうかという点である(六音の字余りにはなるが)。以下に二つ例を示す。

11/2507 玉梓の 道行き占に 占なへば 妹に逢はむと われに告りつる

17/3973 ... 世の中は 数なきものそ 慰むる こともあらむと 里人の 我に告ぐらく...

最初の例は、占い師が「将来妹に逢うだろう」と予測を告げるものであり、助動詞「む」が付いている。次の例は、里人が作者(大伴池主)に「これから先慰めになることもあるだろう」と将来の予測を告げるもので、ここにも意志・推量を表わす助動詞「む」が付いている。

これに対して3789番歌の場合、助動詞「む」はなく単に「今日行く」と終止形「行く」が用いられている。したがって、この部分の正確な意味は「今日これから死に行きます」と将来のことを述べたものではなく、「今日すでに死に行っています」という意味になるはずである。一つ例を示す。

11/2776 道の辺の 草を冬野に 踏み枯らし 我立ち待つと 妹に告げこそ

この例の第四句の「待つ」は「今日行く」の「行く」と同じように終止形であるが、第四句の意味は「(これから) 待ちます」という未来の意味ではなく、「(すでに) 待っています」という現在進行形の意味である。万葉集中から「動詞の終止形+と告ぐ」という表現の例をすべて調べてみたが、「我ここにありと 誰か告げけむ」(226番歌)や「我かく恋ふと 行きて告げこそ」(1498番歌)など全部で11例あるが、結果はすべて上に述べたとおりで例外はない。すなわち、文法的に正しい解釈をする限り、3789番歌の第三句「今日行く」は、通説が言うような娘が死ぬ「前」に言った「これから死に行きます」という予告ではありえないのである。以上が第二の問題点である。

次に、娘が死んだとき作者は遠くの旅先にいたとする①から④の解釈(⑤は異なる)の問題点を指摘しよう。この解釈では「娘がもし『今日死に行きます』と私に予告してくれていたら旅先から帰ってくるのだったのに」と解しているが、どうせ反実仮定の仮定をするのであれば予告日は「今日=死に行く日」ではなく「死に行く日よりももっと前」とするのが自然ではないだろうか。電話も電報もない時代である。仮に娘が「今日死に行きます」と予告するにしても、おそらく使者に手紙を持たせるという形で届けるしかなかったら、手紙が男の手元に届くのは何日か先である。それを男が読んで急いで旅先から帰って来るのにさらに何日かを要し、帰って来たときには娘はとうに死んでしまっている。このような状況なのに、なぜ男は反実仮定の歌の仮定条件の中にわざわざ予告して欲しかった日として「今日」という時間の制限を入れたのだろうか。なぜ予告日を「死に行く日よりももっと前」と仮定しな

かったのだろうか。①から④の解釈ではどうしてもこの点が理解できないのである。これが第三の問題点である。

最後に、第四の問題点として、⑤の解釈の問題点を指摘しよう。⑤は結句「帰り来ましを」を「(死のうとする女を説得し、助けて) 帰って来たであらうに」と解する。文脈としてはこちらの方がはるかに自然であるが、この解釈には一つ無理な点がある。「帰り来ましを」の原文は「還来麻之乎」であるが、万葉集中に12例(3789番歌は除く)ある「還来」の用法を調べてみると、「還来」は単に「どこか遠くから帰ってくる」という意味であり、帰ってくる理由や状況などは別途歌の中で説明されている。つまり、「還来」を解釈するのに「死のうとする女を説得し、助けて」などと歌の言葉にない意味を余計に補足しないと意味が通じないような例は一つもなく、すべて単に「どこか遠くから帰ってくる」という意味だけで文脈が理解できるのである。したがって、⑤のように「還来」を「死のうとする女を助けて帰ってくる」と拡大解釈することには無理があり、そのように無理を押しつけて拡大解釈しないと歌の文脈が通じないということは、歌のほかの部分の解釈に誤りがあることを示唆している。ちなみに、①から④があえて不自然さを承知で「旅先から帰ってくる」という解釈をとっているのは、⑤の解釈にはこのような無理があるからだと思われる。

以上見てきたように、前節に示した先行研究(①から⑤)には少なくとも二つの共通する問題点があり、さらに個別の問題点がそれぞれ一つずつあることがわかった。次節ではこれらの問題点をすべて解消できる新たな解釈を提案する。

### 3. 万葉集3789番歌の新しい解釈

この節では、まず新しい解釈の結果を示し、その後にそれぞれの根拠を個別に示していくことにしよう。まず3789番歌の訓読、直訳、意識を示す。

(訓読) あしひきの 山<sup>かづら</sup>縷の児 今日行くと 我に告げせば 帰り来ましを

(直訳) (あしひきの) 山縷の児が今日行方不明になりましたと、もし(誰かが) 私に告げてくれていたならば、この児は生きて(山から) 家に帰って来る結果になっていたであらうに。

(意識) 山縷の児が「今日」行方不明になりましたと、もし誰かが「行方不明になったその日のうちに」私に告げてくれていたならば、私は直ちに事の重大性と緊急性を察知して搜索を開始し、あらゆる手立てを尽くしてこの娘を探し出し、自殺を思い留まらせ、結果として娘はきっと生きて山から家に帰って来ることになっていたであらう... 娘を死なせてしまったのはひとえに娘の行方不明を知ったのが遅すぎたからで、もっと早く知っていればきっと死なせずすんだらうと思うと残念でならない。

このように解釈すると前節で指摘した四つの問題点はすべて解消する。以下、このことを検証していこう。まず第一の問題点は、自殺する人が果たして「今日死にに行きます」と予告するかどうかという疑問であったが、新しい解釈では「娘が今日行方不明になりました」と娘の身内や親密な友人などが告げるという想定であるから疑問は生じない。よって、第一の問題点は解消する。

次に第二の問題点は、第三句の「今日行く」がもし娘の死ぬ前の予告であるならば「今日行かむ」と意志・推量の助動詞「む」が用いられるはずだという点であるが、新しい解釈では「今日行く」は娘が行方不明になった後の報告であるから「む」が付く必要はなく、第二の問題点もまた解消する。

第三の問題点は、①から④の解釈ではなぜ第三句に「今日」という語が用いられているのか理解できない

いという点であったが、新しい解釈では「今日」は「行方不明になったその日のうちに」という意味であり、この語こそがこの歌の最も重要なキーワードであることが理解できるのである。

第四の問題点は、結句「帰り来ましを」の主語を「男」と見て「男が女を助けて帰って来る」とする⑤の解釈には無理があるというものであったが、新しい解釈では「帰り来る（還来）」の主語は「娘」であり「娘が（生きて山から）帰って来る」という解釈であるから、第四の問題点もまた解消する。ちなみに、新しい解釈では、第三句の原文「今日往跡」の「往＝山に行く」と結句の原文「還来麻之乎」の「還＝山から帰る」の主語は共に「娘」であり、いわば対句的なはたらきをしている。①から⑤の解釈だと、片方の主語は娘で他方は男であるからこうはいかない。

最後に次の点に触れておきたい。新しい解釈によれば、この歌の作者は、もしその日のうちに娘の行方不明を知ったならば娘はきっと生きて帰って来ただろうという強い確信を抱いているように見える。この確信は一体どこから来るのだろうか。この問いには、第三番目の男が詠んだ3790番歌（第1節を参照）が答えてくれる。3790番歌は、娘が行方不明になった後に人々が捜索に出かけた時、この歌の作者もみずから捜索に参加して最終的に娘の死に場所を突き止め、「この娘はいったいどんなルートを辿って一人でこんな山深い所まで来たのだろうか」と疑問に思い、この気持ちを歌にしたものである。この歌から、娘は予め決めておいた死に場所に直行してすぐ入水自殺したのではなく、大人の男たちでさえ「どこをどう通ってここまで来たのか」と不思議に思うほど山深くまで入り込み、長い間さ迷った挙句に入水自殺したことがわかる。このことは、もし行方不明になってすぐに捜索を開始していたら入水自殺する前に娘を探し出せた可能性を強く示唆しており、おそらくこのことが第二番目の男の歌（3789番歌）のあの強い確信につながっているのであろう。

#### 4. おわりに

本論文では、万葉集3789番歌に関する従来の解釈について再検討を行い、新しい解釈を提案した。主なポイントは次の三つである。第一に、第三句の「今日行く」は「今日これから死にに行きます」という自殺の予告内容ではなく「今日（娘が）行方不明になりました」という事後報告であること。第二に、第四句の「我に告げ」は「娘が私に告げる」ではなく「誰か（娘の身内や友人など）が私に告げる」という意味であること。第三に、結句の「帰り来」は「男（歌の作者）が帰って来る」ではなく「娘が生きて山から帰って来る」ことを意味すること。以上のような解釈が妥当なものであるかどうか、多くの方々のご批判をおおきたい。

#### 参考文献

- [1]「万葉集 四」、新日本古典文学大系、岩波書店、pp. 13-14、2003年。
- [2]「万葉集④」、新編日本古典文学全集、小学館、p. 91、1996年。
- [3]「万葉集 原文付全訳注（四）」、中西進、講談社文庫、pp. 19、1983年。
- [4]「万葉集注釋 卷第十六」、澤瀉久孝、中央公論社、p. 15、1966年。
- [5]「万葉集 四」、日本古典文学大系、岩波書店、pp. 119-121、1962年。